映画「誰も知らない」の子どもたち

皆川　美恵子

子どもにかかわる事件が、多発しているからなのだろうか。それとも子どもの事件には、思わず目が行って心がかかってしまうからなのだろうか。日々のニュースの中に、子どもが絶えず登場している印象を禁じえない。

是枝裕和監督の映画「誰も知らない」がカンヌ映画祭で絶賛されたという評判が広がり、さらには現実に起きた子どもの事件をもとに製作されたことを知ると、混み合った公開直前の映画館へ駆けつけた。昭和六三年（一九八八）、西巣鴨で起きた子ども四人置き去り事件が報道されて間もなく、脚本化を構想し、十五年という長い歳月を費やして、二〇〇三年に映画の完成をみたという。映画製作に至る息の長さに驚嘆せずにはいられな

い。事件の中心となった子どもは十四歳であったから、二十九歳になっているわけである。

西巣鴨子ども置き去り事件は、四〇歳の母親が、父親の異なる十四歳、五歳、三歳、二歳の四人の子どもを残し、新しい恋人と暮らす為に出て行ってしまった間に起こった。子どもたちは、出生届けが出されておらず、十四歳の長男は、学校にも通っていなかった。長男が、時折、母から送られてくる現金書留によって、小さなきょうだいの世話をして、ひっそりアパートの一室で暮らしていたのだ。ところが、二歳の妹の死が発覚して、世間の知るところとなる。

この事件を知った是枝氏は当時、二十六歳であり、テレビ制作会社に勤務していたものの、いまだ作品制作には携われずにいた。そして、いつかはこの事件を映画化にと思い続けてきたそうだが、その思いの原点は、十四歳の長男の子どもへの「いとおしさ」にあったという。

死なせてしまった二歳の妹を、秩父の羊山公園の林の中に埋葬し、時折、お墓参りに出かけていた少年。母親と法廷で再会し、母の期待に添えなかったことを自らの責任として涙ぐむ少年。是枝氏は、そばにいたら、「よく頑張ったね」「僕は君のことが好きだよ」と肩を抱いてあげたかったという。それが不可能だから、「僕は、僕の心の中で彼をしっかりと抱きしめるためにこの映画を作ることを決意した。」（『演出ノート』より）と語っている。

子どもの抱きしめ方、子どもへの寄り添い方は、人によってさまざまであろう。映画という映像表現に生きる者にとっての、子どもの抱きしめ方が、「誰も知らない」の映画には示されている。

映画の中のきょうだいは、下から四歳の女の

子、七歳の男の子、十歳の女の子、そして十二歳の長男である。下から三人の子どもたちは、実際に起きた事件の子どもたちより年齢が引き上げられている。長男は、二歳ほど年齢が下の子どもが選ばれていた。

映画は、桃色のスーツケースを大切に運ぶモノレールの車中シーンから始まる。羽田空港の夜景が近づき、スーツケースをさすっている少年の顔がクローズアップされる。突如、昼の光を浴びながらの、母と息子の引越し風景に移る。運び込まれた桃色のスーツケースやカバンから、小さな子どもが出てくる。アパートの大家には二人住まいと偽って、さらに子ども三人を加えて住み着くことになる。

子どもたちは、出生届けが出されておらず、戸籍がない。学校にも保育所にも通っていない。母親が働きに出て、長男・明が専ら子どもの世話をする。買物の外出をしたり、料理らしいことをする。長女はベランダで、ひそやかに洗濯をしている。そしてある日、母親は明に書き置きとお金を託して、四人の子どもを置き去りにする。

明は、やりくりをしながら幼い子どもたちを食べさせる。クリスマスには、安くなったケーキを買う。正月にはお年玉を与える。やがて母親からの仕送りが途絶えると、賞味期限切れのおにぎりなどをコンビニの店員から貰い受ける。電気、ガス、水道が滞納で止められると、公園の水飲み場で洗濯をしたり、身体を洗う。まるで、都市の中で、漂流したロビンソン兄弟のような暮らしぶりになっていく。

やがて四歳のゆきが、不慮の事故で身体が冷た

くなっていく。世間には誰にも知られていない子どもたちだが、公園で知り合った、ゆきが姉のように慕う少女・沙希がいる。桃色のスーツケースの棺に、ゆきを納め、お気に入りの菓子とサンダルも入れる。明と沙希は、兄と姉、そして父と母のように、棺を大事そうに羽田空港へ運び、飛行機の舞い立つ地に埋葬する。

映画の中では幾度か、モノレールが走っているシーンがある。明の父は、羽田空港に勤めていたという説明がなされており、明は父を追いかけるように、モノレールを見つめている。ゆきに、いつか空港に連れて行って飛行機を見せてあげるという約束もしていた。夜、墓を掘り、秘密の葬儀を終えると美しい夜明けを迎える。飛行機が間近で飛び立つシーンと、静かにモノレールが動くシーンは、宮沢賢治の銀河鉄道を思い起こさせる。この時、背景に流れる歌声（タテタカコ「宝石」）は澄みわたり、鎮魂歌のように天空を舞う。

幼いゆきは、いつも小うさぎを持って登場していた。絵本「こうさぎけんたの　たからものさがし」（松野正子作・鎌田暢子絵、童心社）を読んでいるシーンがあったが、絵本の世界のように両親や祖母にかわいがられることはなかった。しかし、明と沙希による優しく手厚い葬儀は、向こうの世界で宝探しをするであろうことを暗示している。

是枝監督はこの映画で、かつての少年をしっかりと強く抱きしめている。それは奇跡のように監督の前に、柳楽優弥という少年が出現したからである。映画は映像の力なしには成立しえない。柳楽優弥の面影は、少年のみが一瞬放つことのできる、たとえようのない宝石のようなきらめきを持っていた。

（十文字学園女子大学）